

ヘンリー・アダムズと女性： 「女性の原始的権利」にみる アダムズの女性観

米 山 美 穂

1. はじめに

『トマス・ジェファソン及びジェイムズ・マディソン政権下における合衆国史』(1889-1991), 『モン・サン・ミッシェルとシャルトル』(1904), 及び『ヘンリー・アダムズの教育』(1907)を主著に持つヘンリー・アダムズ(Henry [Brooks] Adams, 1838-1918)が、歴史家、教育者、社会批評家、思想家として、十九世紀後半から二十世紀にかけてのアメリカ社会に多大な影響を与えたことはよく知られている¹⁾。だが、その多彩な生涯を通じて、女性が彼の絶えざる関心の対象であり、彼の思想に少なからぬ影響を与えていたことはあまり知られていない²⁾。

一般に、アダムズと女性という視点で注意を喚起してきた作品は、彼がアメリカ社会における女性の意味について深い考察を表している、『モン・サン・ミッシェルとシャルトル』と『ヘンリー・アダムズの教育』だけであろう。彼は、その中で、「再生」(reproduction)の象徴という抽象化された存在として女性に焦点を当てている。彼がそこに描き出す女性は、その「性」(sex)が持つ生殖と養育の機能によって社会の繁栄と永続の鍵を握る、強力な女神である。だが、彼は一朝一夕で女性をそのような凝縮された存在として理解したわけではない。それに至るには、幼い頃からの女性に対する彼独自の関心と興味の蓄積が必要であった。なぜなら、彼の女性観は、日常の親密な女性との関わりの中で刺激を受け、錬磨されて、やがてこのような一つの独立した思索へと高められていったからである。

彼は、その女性観の歩みを、「女性の原始的権利」(1876)³⁾、『デモクラシー』(1880)、『エスター』(1884)、『タヒチ最後の女王、マラウ・ターロアの回顧録』(1893)、「シャルトル聖堂の聖母マリアへの祈り」(1901)の五作品の中に記録した⁴⁾。「女性の原始的権利」はローウェル協会のために行った講演であり、『デモクラシー』と『エスター』は十九世紀のアメリカ社会を生きる若い女性を主人公とした小説、『タヒチ最後の女王、マラウ・ターロアの回顧録』は、1890年から翌年にかけて友人のジョン・ラファージと共に南洋を旅行中、タヒチを訪れたときに知り合ったある王族の女性から聞いた話をまとめたもの、「シャルトル聖堂の聖母マリアへの祈り」は、1903年のパリ博覧会で展示品のダイナモに感銘を受けた彼が「ダイナモへの祈り」と共に書き上げた詩である。本論では、それらの作品の中でも、彼が初めて女性に関する興味を公にした「女性の原始的権利」を取り上げ、そこに表された彼の女性観を探る。

アダムズの女性観は、生涯を通して一人の女神にまで高められていったのであるから、それ以前の彼の作品を、そこに至るまでの軌跡として理解することは容易である。だがその理解に気を取られすぎると、彼の各作品を単なる通過点とみなし、それらの独自の価値を軽視することになる。彼は、それらの作品に、単なる通過点として扱うにはあまりにも真剣に、その時折の彼の实生活と思想を表した。彼の女性観は、結果として、いくつかの段階を積み重ねることによって発展していったが、その歴史的な流れに固執して、ある段階において彼が女性を追求した、真剣さと誠実さを無視することはできない。本論では、この視点から、「女性の原始的権利」を考察する。この講演がなされるに至った経緯及び彼がそこに表した思想の源を彼の实生活に求め、実生活と一体化した彼の女性観のあり方とその内容を考えてみたい。

2. アダムズ家の女性

アダムズの思想や実生活に深く関わった女性は、彼の生涯において、四人いた。祖母のルイザ・キャサリン・ジョンソン (Louisa Catherine Johnson

Adams, 1775-1852) と姉のルイザ (Louisa Adams Kuhn, 1831-1870), それに妻のマリアン・フーパー (Marian Hooper Adams, 1843-1885) と友人のエリザベス・シャーマン・キャメロン (Elizabeth Sherman Cameron, 1857-1944) である。この四人の中で、1876 年に行われた彼の講演には、祖母と姉の二人のルイザが間接的な影響を、妻のマリアンが直接の影響を与えていた⁵⁾。

アダムズは、1907 年に私家出版した彼の半自叙伝『ヘンリー・アダムズの教育』の中で、アダムズ家の二人のルイザの思い出を詳しく記している⁶⁾。それによると、この二人の女性は、彼の生涯変わらぬ感嘆と賞賛を勝ち得るような、傑出した女性達であった。彼にとって、それぞれに苦難の人生を送った彼女達に共通していたのは、困難に立ち向かい、それを乗り越えてゆく強靱な精神力と断固たる意志の力に恵まれていたことであった⁷⁾。

祖母のルイザは、優秀な外交官で、アメリカの第六代大統領まで務めた政治家ジョン・クインシー・アダムズの妻である。しかし、十八世紀末から十九世紀にかけての困難な時代に、政治家として輝かしい肩書きを連ねることができたアダムズ家の男の妻であることは、彼女にとって厳しい試練であった。ロンドンで生まれ、ヨーロッパで教育を受けたルイザは、もともと、アダムズ家の禁欲的な理想主義と合理主義とは異質の存在である。彼女は、繊細で芸術的な感受性と美しい容姿に恵まれ、贅沢な環境の中で父親に溺愛されて育った。一方、夫の両親であったジョン・アダムズとアビゲイルも、政治家としての活躍を期待していた息子の妻には頑健なアメリカ女性を望んでいたために、この結婚に不安と失望を隠さなかった。ルイザは、厳しい環境の中で精神的な援助もなく孤独であった。だが、彼女には華奢な外見からは想像もつかないような強靱な精神力が備わっていた。彼女は、その精神力によって数々の困難を乗り越え、周囲の信頼を勝ち得ていったのである⁸⁾。

ヘンリー (アダムズ) の七才上の姉ルイザは、「才気煥発な女性については長くさまざまな経験があるが、彼女の弟が出会ったそういう女性達の中でも、最も輝いていた人達の一人であった。」⁹⁾ 彼女は、十三才の頃にはすでに、

両親が持て余す問題児であった。精力と才能に恵まれていた彼女は、男性中心のアダムズ家の教育が息苦しくて我慢ならなかった。自分の才能の自由な発現を望んだ彼女は、伝統と因習に縛られた社会に自分を適応させることができず、疎外感と無力感に悩まされたあげく、不幸な結婚をして、ヨーロッパへ脱出したのであった¹⁰⁾。

気だてが優しく、控えめな少年であったヘンリーは、才気に溢れた姉に魅了された。彼の姉に対する同情的な態度は、姉がアメリカ人としての社会的な義務を放棄して、ヨーロッパに脱出した後も決して変わらない。義務に厳格な両親はそのような彼女を責めたが、彼は一貫して彼女を弁護し続けた。そして、彼女は、その激しい人生の最後に、それまでに増して強烈な印象を彼に残した。それは、破傷風に罹った彼女が、激しいけいれんに襲われ、身体と言語の自由を失ってもなお敢然と、死と闘っている姿であった。病床に駆けつけた彼は、周囲の人間が悲しみと恐怖に打ちひしがれる中で、一人明るく毅然とした態度を保ち続けた彼女に、強靱な精神力を見たのである。

最もひどい発作の最中でさえ、かりにも発音できる限りは、彼女自身指示を与え、また、僕たちが最も恐ろしい危険に面して、恐怖に震えているにもかかわらず、僕たちみんなを笑わせるような面白くてユーモアのあることをいうんだ¹¹⁾。

ヘンリーにとって、祖母は、姉のルイザよりも、現実的には遠い存在であった。彼がクインシーの屋敷を訪ねるようになったときには、祖母はすでに高齢に達していた。彼は、彼女の静謐な威厳と老いてなお繊細な容姿に憧れと尊敬を抱きながら、彼女との親密な交流を実際にはほとんど持たなかった。彼は、むしろその距離によって、彼女に対する親愛の情を自由に深めることができたのである。彼女の死後、遺された彼女の日記や手紙に親しんだ彼は、彼女の伝記の執筆まで計画した。彼は、その創造的な過程で彼女を十分に理想化することができたのである。それに引き替え、姉ルイザは、姉弟の親密さによって、直接的であるがために圧倒的なインパクトを彼に与えた。アダムズは、この二人によって、鮮烈な女性の洗礼を受けたと言うこと

ができる¹²⁾。

そして、さらに、彼女達アダムズ家の女性を考えるとときに忘れてはならないことがある。それは、彼女達が、曾祖母のアビゲイルを始めとして彼の母も含め、才能に恵まれた優れて知性的な女性達でありながら、その才能と教養を、夫を補佐し、家族を守ることに傾け続けてきたということである。精力的な言動で夫を翻弄した姉のルイザでさえ、常に夫と行動を共にし続けたという点で、やはり家族という枠組みを守っていた。女性の義務に忠実な彼女達にとって、活躍の場は家庭であり、夫を介しての社交界以外にはあり得なかった。

そのような彼女達でも、女性として不満がなかったわけではない。政治家としての激務のために、家庭を守る女性の貢献を忘れるような男性の言動には、腹を据えかねるようなこともあった。だが、彼女達が男性に求めたのは、家庭内における彼女達の役割を適正に評価し、彼女達の尊厳を男性のものと同等に尊重することであった。それは、むしろ、女性の立場に対する同情と理解の要求であり、彼女達の基本的な立場を変えようとするものではなかった¹³⁾。

アダムスは、姉ルイザを失って二年目の春、そして講演の四年前に当たる1872年に、マリアン・フーパーと結婚した。彼女は美しさで人目を引く女性ではなかったが、聡明で活発な、独立心に富んだ女性であった¹⁴⁾。ヘンリー・ジェイムズは、時折鋭い舌鋒をひらめかせる彼女を「ペティコートをはいたヴォルテールそのもの」¹⁵⁾と描写している。幼いときに母親を亡くしてインテリの父親一人に育てられた彼女は、衆目には一風変わったところのある女性に見えた。だが、アダムズにとって、マリアンは、彼が祖母と姉に見いだしたのと同じ強さを持った特別な女性であった。特に、華奢な体つき、幅広い教養、芸術を理解する豊かな感受性などの特徴によって、彼女は、祖母ルイザのタイプの女性と彼の目には映ったのかもしれない。さらに、十分な財産を相続していた彼女は、経済的にも独立していた。アダムズにとって、マリアンとの結婚生活は、平穏で幸福な充実した日々であった。彼は、文化

の砦ボストンで、『北米評論』(*North American Review*)の編集長として、またハーヴァード大学の歴史学の教師として精力的に知的活動を行っていた。そして、彼女は、主婦として、また社交界ではホステスとして、彼の補佐を有能に果たしていたのである。彼女は、夫の仕事を励まし、その環境を整えることを自分の義務と心得ていた。彼女もまた、アダムズ家の女性達のように、上流階級の一婦人として、家庭にとどまることを望んだ女性であった¹⁶⁾。

このように、二人のルイザのような女性達を祖母と姉に持ち、さらにマリアンのような優れた女性を妻としたアダムズは、自分が深い興味を抱いている学問分野において、女性が奴隷として貶められているのを見過ごすことができなかったのである。彼は、ちょうどその頃、ハーヴァード大学の三人の学生との共同プロジェクトとして、アングロ・サクソン社会の法制度の研究を進めていた¹⁷⁾。そして、民主主義的な社会であったアングロ・サクソン社会では、女性が男性とほぼ同等の権利を認められていたと結論づけていた。「騎士道精神」に駆り立てられた彼は、この研究結果を講演で発表することにしたのである。彼に講演のヒントを与えたのは、1873年に友人のヘンリー・メイン卿がロンドンで行った講演「古代における結婚した女性の財産の歴史」であった¹⁸⁾。

3. 「女性の原始的権利」

メイン卿を始めとする古代社会の研究者が主張していた説は、古代社会における結婚は男性が女性を売買または略奪することによって成立したため、男性は女性に対する絶対的な権力を獲得し、女性は一生男性の奴隷にとどまったというものであった。彼らはさらに、そのような女性の奴隷状態からの解放が、慈愛を説くキリスト教の普及によって成し遂げられたと説明した。アダムズが当時の法制度を調べることによって論破しようとしたのは、この二点であった。

彼らはまず、売買または略奪による結婚を導き出すために、いかなる所有も存在しなかったユートピア的な原始共同社会の存在を想定した。すべてを

共有するこの社会では、特定の男女の結びつきさえも存在しない。母親と子どものつながりのみが社会的な関係として重要視されていた、いわゆる母系社会である。だが、この平等な社会は長くは続かない。人間に所有欲が芽生えたからである。彼らによれば、この所有欲のために、売買・略奪による結婚という形態が生じた。つまり、男性が共同体の利益を侵害せずに女性に対する所有欲を満足させるためには、その共同体以外の社会から女性を手に入れるしかないのであった。その方法として、売買や略奪など女性の意志を無視した手段が取られ、結局それが制度化して一般の結婚形式になった。そして、女性は、男性の力ずくの欲望の対象として、もの同然の扱いを受けることになったというのである。

結婚という制度が成立した経過として、アダムズもここまでは賛成するのである。しかし、彼は、結婚が強権的な手段に基づいて成立した結果として、女性は奴隷同然に扱われたという説明を拒否する。彼の考える所有欲は、物理的な力による対象の獲得行動を導く一方で、必ずその対象に対する愛情を伴っているからである。彼は、人間は愛するからこそ、それを自分のものにしたいと願うはずだと考える。彼にとって、所有欲は愛と表裏一体の欲望であった。したがって、愛するがゆえにその対価を支払い、または略奪までした女性を、男性が奴隷の状態に貶めるはずがないのであった¹⁹⁾。

メイン卿達は、所有欲を力とのみ結びつけて考えたために、人間的な道徳が発達していない野蛮な社会では、当然強者である男性が女性を奴隷として扱っただろうと推論した。男女の肉体的な力の差がなくなる以上、力の原理を緩和して女性を奴隷状態から解放したのは、キリスト教の説く人間愛であるという彼らの結論は論理的な帰結であった。一方、アダムズは、男女の力の差を緩和する愛情をア・プリオリに所有欲と結びつけてしまったために、最初から奴隷状態の存在を否定することができたのである。そして、彼女達の解放のためにキリスト教の登場を待つ必要もなくなった。つまり、彼の議論全体を支える礎は、彼の信念としか言いようのない、所有欲と愛情についてのこの確信なのである。彼は、その強固な確信にしたがって、アメリ

カ・インディアン社会、古代エジプト社会、古代ギリシャ社会、古代ローマ社会、古代アイスランド社会の中に、自説を証明する例を探し、古代社会一般において、女性が決して奴隷状態にはなかったことを論証しようとしたのであった。

アダムズが各社会を通じて女性の権利として取り上げるのは、あくまで、結婚後の女性に認められていた権利である。それは、例えば、自己の名誉を守る権利、財産を保持する権利、離婚する権利などであった。彼は、特に、古代ギリシャ社会と古代アイスランド社会における女性の地位について詳述した。彼がそれぞれの社会について具体例として選んだのは、ホメーロスの叙事詩『オデュッセイアー』に登場するオデュッセウスの妻ペーネロペイアと、アイスランドの英雄詩『ニャールスサーガ』に登場する女丈夫ハラゲルズルであった。

『オデュッセイアー』のペーネロペイアは、生死のわからない夫の帰りを待つ間、館に押しかけてきて傍若無人に振る舞う求婚者の一団に悩まされる。彼らの目的は、オデュッセウスが戻らなければ、その妻のペーネロペイアと結婚することによって手に入れることができるイタケーの長の地位だった。彼女は再婚を望まなかったが、ギリシャの法によると、再婚可能な年齢の寡婦はそのまま独り身を保つことができない。だがその一方で、夫の生死が判明するまで再婚を猶予する法もあった。彼女は、その法を盾に取り、再婚相手を選ぶようにという周囲からの圧迫に耐え、決断を延ばし続ける。その騒ぎの中で、息子のテーレマコスも、母親の不決断に業を煮やしながらも、母親の求婚者たちが自分の相続財産を食いつぶしていくのを黙っているしかない。彼の意志で無理矢理に彼女を動かすことはできないのである。もし彼が自分の利益のために母親をないがしろにすることがあれば、彼女の親族が、彼女のために報復を図るはずであった。彼女の父親も再婚を勧めてはいたが、強制する権限は持たなかった。つまり、アダムズによれば、彼女の意志はすべての男性の意志に最優先されたことになる。

アダムズの主張する通り、ここに観察できるペーネロペイアの地位は決し

て奴隷のものではない。彼女は、もし奴隷であったならば抗しようのないはずの、父親と息子の権威に服従をせまられることもなく、夫を待ち続けることができた。再婚を決めたとしても、相手を選ぶ権利は彼女に留保されていたし、息子が理不尽な行動を起こせば実家の父と兄弟が守ってくれるはずであった。イタケーの長の地位が彼女を媒介として再婚相手に承継されることをみても、彼女の社会的地位は決して貶められてはいなかったといえることができる。

ペーネロペイアの例でアダムズが示そうとしていたのは、いかに彼女の意志が周囲の男性によって尊重されていたかということであった。その限りでは、彼の目的は十分に果たされたと言える。だが、ここで見落としてはならないのは、結局彼女を守っていたのは、彼女自身の意志と賢さであったということなのである。たとえ彼女が盾にすることができる法律があったにしても、違反に対する罰則とそれを厳格に履行する機関が存在しなければ、社会的な弱者である女性にとって、その法はほとんど実効性を持たない。女性の権利を尊重するかどうかの決定権を握っているのは、やはり男性なのである。そして、そのような社会で女性が自分の意志を遂げるために必要なのは、無為に男性の好意を待つことなく、確固とした意志を持ち、知恵を働かせて、男性の支持を得ようと努めることであった。アダムズは、ペーネロペイアを息子の絶望的な嘆きにも、父親の助言にも、求婚者の熱心な求めにも耳を貸そうとしなかった独立心の強い女性として描いたが、実際に彼女が自分を守るためにできたことは、策を講じて、決定を引き延ばすことであった。彼女は、死期の迫った舅の経帷子を織りあげるまではと返事を延ばし、織りあがった布を毎晩ほどいていた²⁰。この抜け目のなさがなければ、彼女は、求婚者達の圧力に耐えきれず、早急に不本意な結婚を強いられていたはずなのである。

確かに、男性が支配権を握っている社会においては、支配者である男性に女性を尊重するつもりがなければ、女性がいくら権利を主張しても無駄である。女性の権利が尊重されるためには、男性にその用意があることが不可欠

な要件であった。そして、アダムズは、議論の始めに提示した本能論によって、それを所与の資質として男性に与えてしまったのであった。ところが、彼自身が認めているように、男性が弱い女性の権利を力によって剥奪した例は、決して稀ではなかったのである。むしろ、彼が参照する例のほうが特筆すべき例外であった。そして、その珍しさもあって、彼が取り上げた具体例の中では、男性が女性を扱う寛容さとともに、女性自身の自己を貫徹する意志とそれを支える賢さ・勇敢さが、賞賛に値する特質として強調されていると考えられる。彼は、女性に権利が認められていたことを積極的に支持することによって、自分の権利を守ることができた、意志の力に富んだ独立した女性を肯定しているのである。

アダムズがペーネロペイアの次に取り上げる『ニャールスサーガ』のハラゲルズルは、機を織ることによって身を守った静的なペーネロペイアとは対照的に、男性を凌駕するほどの行動力を備えた意志力で、周囲を圧倒する女性であった。『ニャールスサーガ』の舞台であるアイスランドの社会では、娘の結婚相手及び結婚の条件を決める権限がすべて父親に与えられていた。しかし、ハラゲルズルは、父親が自分に何の相談もなく結婚を取り決めたことを許すことができない。彼女は、とりあえず父親の決定に従って結婚するものの、やがて、人を雇って夫を殺し、父親の元に戻ってしまった。娘の激しい気性に懲りた父親は、それからは彼女に再婚の決定を委ねることにしたが、彼女はさらに二人の夫を殺害してしまう。三人の夫から莫大な財産を相続した彼女は、誰の支配に屈することもなく、悠々と一生を送ったのであった。

ハラゲルズルは、たとえ法的に権利が認められていなくても自らの力でそれを勝ち取ってしまうような、猛々しい女丈夫であった。アダムズは、男性に勝るとも劣らない彼女の力を野生動物の本能にたとえた。女性の意志の力を認めた彼にとっても、男性の権威を脅かすまでに至ったハラゲルズルの力は、彼の認める限界を超え、人間の領域を離れてしまったのであった。だが、その人間離れした彼女の力に恐れをなしていたにせよ、彼は決して彼女を批

判しようとしてはいないのである。

アイスランド社会の例でアダムズにとって重要だったのは、ハラゲルズルよりもむしろ、法そのものであった。アイスランド社会は、彼の属するアングロ・サクソン族の祖であったゲルマン人が形成した社会であり、その社会を知ることは彼にとってより重要であったのである。ハラゲルズルの独立心を満足させるには十分ではなかったかもしれないが、女性の権利を擁護する法は、彼女の社会にも存在した。それによれば、彼女は、保護・監督権という制限こそついてはいたが、自分の財産を保有することができたし、離婚も可能であった。むしろ、アダムズは、女性が、法的には男性とほぼ平等であったと主張した。男性が女性に対して持っていた保護・監督権は、力が支配する社会ではやむを得ない当然の結果であり、差別ではなかったのである。アイスランド社会には、ハラゲルズルのような女丈夫も確かに存在したが、一般に女性は、男性と同等の社会的義務を果たすために必要な身体的能力を欠いていると考えられた。力が決定権を持つ社会で、戦争と決闘に参加できないこと、自分の生活と名誉を守るための戦いに男性を頼まなくてはならないことは、女性の地位を男性に対して致命的に不利にしたのである。男性の保護・監督権は、見方を変えれば、女性の自由を拘束するものではなく、そのように弱い女性を守るためのものであった。

アダムズは、あくまで、野蛮な力の時代に女性の権利が尊重されたことを主張し続けた。彼にとっては、女性の権利が守られた例がむしろ例外であって、多くの場合それが蹂躪されていたことは、問題ではないのである。彼が主張するように、「法の違反は法ではなかった。」²¹⁾ 彼に重要なのは、法の実効性ではなく、法の存在自体であった。つまり、彼は、法の存在を強調するために、法が遵守された例を取り上げてきたのである。

そして、アダムズが女性の権利を守る法が存在したことを強調しようとしたもう一つの動機は、そのような進歩的な法を受け入れた優れた社会が存在したことを明らかにし、さらにはその社会がアメリカ社会の原型であることを示すことにあった。彼が前提として用いた本能論は、女性の権利が尊重さ

れた理由を説明するよりもむしろ、彼の理想とする社会が、人間の本能に基づくが故に必然であり最良の結果であることを導き出すために必要だったのである。

アダムズは、人間の自然で健全な所有欲を社会発展の原動力であるとした。その所有欲を女性の権利を擁護するために用いたのは、家族における女性の地位を高めることが、社会発展のための重要な素地となるからである。彼にとって、女性と家族と社会は分かち難く一つに結びついていた。すなわち、そのうちの一つを貶めることは、他の二つも貶めることになるのである。また、その逆に、家族において女性の権利が尊重されていたことを論証することは、家族は女性と子どもに服従を強いる男性の力によって無理矢理形成されたものであったという説の誤りを正し、その名誉を回復することでもあった。そして、彼にとって、その家族こそ、ゲルマン人が形成した社会の最も重要な基盤を成しているものであり、またアメリカ社会の基盤でもあると信じているものなのである。

彼によれば、家族は、「人間のあらゆる熱情の中でも最も奥深いところに根ざす愛情と所有欲の、精力的な具体化」²²⁾なのである。そして、ゲルマン社会は、原始共同社会の母系制を廃し、父親の地位を明確化して、父・母・子からなる家族制度を充実させたからこそ、最強の社会を形成し、征服者となることができたのであった。そのような民族は必然的に統治能力に優れ、発達する私有財産制を統御するために不可欠な法制度を整備する能力も、社会改革を取り入れる寛容な知性も備えていたのである。アダムズにとって、父系制に基づく家族制度が社会発展のすべての鍵を握っていた。

ところが、中世のキリスト教は、女性の地位を貶めることによって、家族の地位も貶めた。アダムズによれば、キリスト教会は、民主主義的な社会を作り上げていたゲルマン社会と、すでに社会が腐敗し墮落していたローマ帝国とに、絶大な影響を与えたのである。教会を中心に社会の再構成が進み、教会の説く新しい倫理がそれまでの道徳を大きく変えた。そして、その変化によって最も影響を受けたのが、結婚のあり方であった。教会はローマ帝国

の道徳的な腐敗に憤激したが、中でも女性の墮落に憤り、女性の社会的及び法的権利を著しく削減した。さらに、結婚の倫理的側面と宗教的意味合いを強調した教会は、結婚の契約によって自己の権利の保持に努めるより、神父と夫に服従するよう女性に説いた。権利を縮小され、独立した自己の存在を脅かされた女性は、教会に対する精神的な依存度を強め、ますます独立を失っていったのであった。

女性の権利が縮小され、男女の平等な関係が崩されただけではなく、さらに神父が介入したことによって、家族は平衡を著しく損なわれることになった。しかし、アダムズは、それ以降の時代については、やがてクロムウェルとルターがイギリスとドイツでそれぞれローマ教会の勢力を駆逐したと述べるにとどまり、それが女性の復権と民主主義的な家族の復活にどう結びついていったのかを詳述しない。彼はこれ以上の歴史的な例証を必要と認めないのである。歴史は反復するという歴史観を持つ彼にとって、人間が経験する事実はすべて過去に経験され、結論を導き出されていた。社会における家族のあり方とその重要性については、すでに十分な歴史の検証を経ているのである。家族が人間の本性に基づき、歴史的な永続性を持つものである限り、そのなかで女性が貶められたままでいるはずはない。家族の自然なあり方をゆがめ、夫または妻のいずれかの権利を偏重しようとするれば、必ず反動が起こって、そのバランスを回復しようとするのである。古代社会における女性の尊厳の回復に努めたアダムズは、女性を包含する家族制を歴史的な真理として、力強く肯定して論を終えるのである。

人間の発展の記録にあるすべての新しい発見は、以下のよく知られている事実を指し示している。人間の最も強力な本能は、愛情と所有欲であり、これらの本能に、家族は立脚している。他のいかなる制度も、同様のあるいは同様に強固な基礎を得ることはできない。この理由によって、家族は、人間のあらゆる組織において、最も強固で健全なものである。家族は、今までいつもそうであったし、これからもそうであろうが、対抗する他の組織を踏みしだくのだ。そして、最後に、社会は、一方で、

家族の理論を過大に強調し、あるいは、侮蔑の対象におとしめられるのを許したが、そういう限界においては、激しい反動が見られたのである²³⁾。

4. 「女性の原始的権利」とアメリカ社会における女性

アダムズは、男性の保護・監督権に従う必要があったのを除けば、ゲルマン社会の女性は男性とほぼ同等の法的権利を享受していたと主張した。そして、彼がその主張によって意図していたのは、夫婦関係における男女の権利の平等であり、家族における父親と母親の権利の平等であった。つまり、彼にとって、女性の権利が守られなければならないのは、社会において家族の領域だけであった。彼は、所有欲に基づく力の原理は愛情で相殺しても、女性が社会の中心に位置することになる母系制を早々と人間の発展の歴史から退場させたことによって、女性の社会的意味を、男性を頭とする家族の中に限定したのである。父系社会が歴史の必然であることを信じていた彼にとって、それは女性を貶めることにはならなかった。女性は彼にとって、最初から家庭にあるべき性であった。したがって、アダムズが、女性の権利から家族の重要性へと論を進めていったのは、女性の地位を守るためにも当然の展開であった。家族内での平等が保たれていても、家族そのものの社会的地位が低ければ、家族以外に居場所のない女性の身分は、結果として貶められていることになるからである。

アダムズは、女性を奴隷の辱めから救う過程において、女性は社会的に家族と直結した存在であること、その家族の中で女性の地位は男性とほぼ同等であったこと、しかしその権利を享受することができたのは賢く、意志の強い選ばれた女性達だけであったことを確認した。そして、それは、まさにアダムズ家の女性達のあり方を説明するものであった。彼は、アメリカ社会に通ずる理想的な民主主義社会の基盤として、女性の地位を説明し、家族のあり方を示したために、当然のこととして、そこに自分が賞賛する彼女達の姿を重ねたのであった。

アダムズが解釈するホメーロスのペーネロペイアも『ニャールスサーガ』のハラゲルズルも、それぞれのやり方こそ違ったが、自己の意志を貫くため勇敢に周囲の男性と闘った誇り高い女性達であった。彼が、女性の権利が守られた例として彼女達を積極的に取り上げたのは、彼が賞賛するアダムズ家の女性と同じタイプに属していたからでもあった。彼にとって、彼女達のような誇り高く、独立した女性こそ、常に男性の尊敬を受けるに値するのであった。彼女達に比べれば、ゲルマン社会から誇るべき特質をすべて奪い取ったキリスト教会が、彼女達の代わりに生み出した、おとなしく従順な、弱々しい女性像など、何の価値も持たないのである。

しかし、アダムズが理想とした女性のあり方はまた、アダムズ家の女性達であったからこそ体现することができた特異な女性像でもあった。バーバラ・ウェルターは、その論文の中で、十九世紀のヴィクトリア文化が、女性の本性として「信仰心」(piety)を位置づけ、女性の「純粋性」(purity)と男性に対する倫理的優位を強調したが、その反面、女性の独立と自主性を奪い、男性に対する「従順」(submissiveness)を義務づけ、女性の価値と領域を家庭に限定したと分析して見せた²⁴⁾。キリスト教に懐疑的であったアダムズ²⁵⁾は、信仰心に由来する女性の純粋性と従順性には重きを置かなかったが、自己犠牲的な奉仕に基づく女性の「家庭性」(domesticity)には最大限の注意を払った。一般的には、「家庭性」もキリスト教の倫理的色彩が濃いものであったが、その中には、女性に家庭の守り手としての責任と自覚を促し、家庭における女性の仕事を男性の社会における仕事と同等のものとして位置づけようとした動きもあったことを考慮すれば、それは彼の主張するところとほとんど変わらなかった。だが、この「家庭性」が支配的な思想として広まった中流階級において、実際にアダムズ家の女性達のようにそれを実践できた女性の数は、かなり限られたものだったのである。

家庭人であることの責任を自覚し、そこに精神の充足を見いだそうとした女性達にとって、最も困難な障害となったのは、男性の女性に対する理解度の低さであった²⁶⁾。曾祖母のアビゲイルも祖母のルイザも、保守的なアダム

ズ家の男達に不満がないことはなかったが、それでも彼女達は、彼女達的能力と貢献を理解する器を持った彼らによって、女性の権利を守る法律がほとんど整っていなかった時代にも、優れた女性として尊重されたのである。アダムズ自身のマリアンに対する態度については、言うまでもなかった。つまり、アダムズ家の女性達が、その能力を十分に家庭において発揮することができたのは、アダムズ家の男達が彼女達にふさわしい優れた男達であったからなのであった。そして、中流階級の男性達には、女性の価値を理解することができるような優れた男性がまだまだ少なかったのである。アダムズが古代社会の女性を取り巻く状況として理解していたのは、まさにこの状況であった。

優れた男女が形成する家庭を社会基盤として取り入れた社会こそが、他を圧する優れた社会となる。アダムズが暗に主張していたのは、このエリート主義であった。そして、彼がその優れた男女が集まっている場所として無意識に思い描いていたのは、彼自身が属する上流社会であったはずなのである²⁷⁾。

5. おわりに

アダムズは、女性の領域を家庭に限定し、その範囲において、女性に男性との権利の平等を認めた。家庭を守る女性を理想とし、女性の参政権運動に代表される社会参加を嫌悪した彼には、女性に対して政治的・社会的権利の平等を認める意志は全くなかったのである。だが、彼は、女性の男性に対する社会的な従属を、女性の肉体的能力に帰していたはずである。彼は、アイスランドの英雄詩を分析して、女性の法的劣位を余儀ないものにしているのは、女性の戦闘に加わる肉体的能力の欠如だとした。戦いが紛争の解決手段である限り、女性は、男性の保護・監督権に従わなければならない。しかし、それは、物理的な力が社会の支配権を決定する間だけのはずである。文明の発展によって物理的な力が社会の中心から排斥され、人間の理性が決定権を握るようになったとき、女性は、もし望むならば、独立した存在として社会

参加を認められていいはずであった。

その論理的な帰結に対抗し、今まで通り既存の体制を維持したいアダムズは、やがて、物理的な力の欠如によるくびきをはずした女性に、理性の虚弱という枷をはめ、社会から締め出そうとするであろう。男性と同等の社会参加を不可能とするのは、今度は、女性の生来的な女性の理性の虚弱さとなった。だが、女性の理性が男性に劣るとは信じられない女性達からは、そのような男性の偏見に対抗し、女性の社会的領域を広げようとする動きが活発になってきていた。アダムズ家の女性の生き方は、むしろ保守的な上流・中流階級の女性達の上に受け入れられる旧弊な価値観となりつつあった。アダムズは、『デモクラシー』、『エスター』において、自分が賞賛する意志の強い、独立した現代女性を主人公として扱うとき、十九世紀社会における女性の理性と社会参加の問題に直面せざるをえなくなるであろう。その意味で、本論で考察したアダムズの女性像は、これから彼が思索を重ねていく女性のあり方の基点として重要なのである。

注

- 1) 初出は以下の通りである。Henry Adams, *History of the United States during the Administrations of Thomas Jefferson and James Madison* (New York: Charles Scribner's Sons, 1889-1991), 9 vols.; idem, *Mont Saint Michel and Chartres* (Washington: Privately printed, 1904); idem, *The Education of Henry Adams* (Washington: Privately printed, 1907).
- 2) アダムズが女性から受けた影響及び女性に抱いた関心をテーマにした研究の数は少ない。その中で重要なものを挙げておく。このテーマによるアダムズ研究の先駆けとなったのは、Katharine Simonds, "The Tragedy of Mrs. Henry Adams," *New England Quarterly* 9 (December 1936): 564-82 である。アダムズの著作に一貫して表される女性への関心を最初に指摘したのが、Richard F. Miller, "Henry Adams and the Influence of Woman," *American Literature* 18 (January 1948): 291-98。ミラーはアダムズ研究に女性という視点を確立するのに大きく貢献した。女性をテーマとした最初の詳細なアダムズ研究となったのが、Sister A. Healy, "Study of Non-Rational Elements in the Works of Henry Adams as Centralized in His Attitudes toward Women" (Ph. D. diss., University of Wisconsin, 1956)。ヒーリーは、アダムズの全作品を概観し、彼の非理性への傾向を女性への関心の強さに見ようとした。今までの研究の中では、最も入念でまとまったものである。ヘンリー・ジェイムズとアダムズを比較することにより、『デモクラシー』と『エスター』を考察したのが、Jane

- Brown Gillette, "Medusa/Muse: Women as Images of Chaos and Order in the Writings of Henry Adams and Henry James" (Ph. D. diss., Yale University, 1972)。最近のものでは、フェミニズムの視点からアダムズの作品を考察しようとする Adelle Nora Mery, "Henry Adams's 'Mythological' Heroines: 'Failures' in a Patriarchal Society" (Ph. D. diss., Texas A & M University, 1990) がある。
- 3) Henry Adams, "Primitive Rights of Women," *The Great Secession Winter of 1860-61 and Other Essays*, ed. George Hochfield (New York: Sagamore Press, 1958), 335-60. 1876年12月9日に行われた講演の内容は、1891年に出版された『歴史に関するエッセイ』*Historical Essays* (New York: Charles Scribner's Sons, 1891) に改訂して、収録された。元原稿が残されていないので、本論が参照しているのは改訂版であるが、両者の内容は大筋において変わっていないと考えられる。Henry Adams, *Sketches for the North American Review*, ed. Edward Chalfant (Hamden, Conn.: Archon Books, 1986), 160-74.
 - 4) [Henry Adams], *Democracy: An American Novel*, Leisure Hour Series, no. 112 (New York: Henry Holt & Co., 1880); Frances Snow Compton [Henry Adams], *Esther: A Novel*, An American Novel Series, no. 3 (New York: Henry Holt & Co., 1884); Henry Adams, *Memories of Marau Taaroa, Last Queen of Tahiti* (Washington: Privately printed, 1893); idem, "Prayer to the Virgin of Chartres," *Letters to a Niece and Prayer to the Virgin of Chartres* (Boston: Houghton Mifflin Co., 1920), 125-34.
 - 5) エリザベス・シャーマン・キャメロンは、1878年にペンシルバニア州の上院議員ジェームズ・ドナルド・キャメロンと結婚した。アダムズ夫妻と彼女の交際は、1881年に妻のマリアンがジョン・ヘイ宅で彼女と出会ってから始まった。したがって、講演の行われた1876年の時点では、アダムズと彼女はまだ知り合っていない。
 - 6) Henry Adams, *The Education of Henry Adams*, ed. Ernest Samuels (Boston: Houghton Mifflin Co., 1973), 16-19, 35, 85-87, 287-88.
 - 7) アダムズとアダムズ家の女性との関わりについては、彼の『ヘンリー・アダムズの教育』に加えて、Paul C. Nagel, *The Adams Women: Abigail and Louisa Adams, Their Sisters and Daughters* (New York: Oxford University Press, 1987) 及び idem, *Descent from Glory: Four Generations of the John Adams Family* (New York: Oxford University Press, 1983) に詳しい。その他、参考になるアダムズの伝記としては、Edward Chalfant, *Both Sides of the Ocean: A Biography of Henry Adams, His First Life, 1838-1862* (Hamden, Conn.: Archon Books, 1982); idem, *Better in Darkness: A Biography of Henry Adams, His Second Life, 1862-1891* (Hamden, Conn.: Archon Books, 1994); Patricia O'Toole, *The Five of Hearts: An Intimate Portrait of Henry Adams and His Friends, 1880-1918* (New York: Clarkson N., 1990); Ernest Samuels, *The Young Henry Adams* (Cambridge: Harvard University Press, 1948); idem, *Henry Adams: The Middle Years* (Cambridge: Belknap Press of Harvard University Press, 1958); idem, *Henry Adams: The Major Phase* (Cambridge: Belknap Press of Harvard University Press, 1964) がある。
 - 8) Nagel, *Adams Women*, chaps. 9-10.

- 9) Adams, *Education*, 35.
- 10) Nagel, *Descent*, chaps. 10 and 12.
- 11) Henry Adams, letter to Charles Milnes Gaskell, July 8, 1870, *Letters of Henry Adams*, ed. J. C. Levenson et al., vol. 2. (Cambridge: Belknap Press of Harvard University Press, 1982), 73 (以下, *Letters* と省略).
- 12) アダムズがこの二人に惹かれたのは、彼女がアダムズ家の保守的で禁欲的な合理主義とは異なった気質を持っていたからでもある。彼は、政治家としてではなく知識人として生きることを望んだ自分が、アダムズ家の伝統から外れていることを常に認識していた。特に彼は、芸術的な素質に優れていた祖母のルイザに親近感を抱いていた。Nagel, *Adams Women*, 275.
- 13) Nagel, *Adams Women*, chaps. 9-10; idem, *Descent*, 22-31; Abigail Adams, letter to John Adams, March 31, 1776, *The Book of Abigail and John: Selected Letters of the Adams Family, 1762-1784*, ed. L. H. Butterfield, Marc Friedlaender, and Mary-Jo Kline (Cambridge: Harvard University Press, 1975), 121.
- 14) Adams, letter to Charles Milnes Gaskell, March 26, 1872, *Letters*, 2: 133-34.
- 15) Henry James, letter to Grace Norton, September 1880, *Henry James Letters*, ed. Leon Edel, vol. 2 (Cambridge: Harvard University Press, 1974-84), 307, quoted in *The Correspondence of Henry James and Henry Adams, 1877-1914*, ed. George Monteiro (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1992), 6.
- 16) Chalfant, *Better in Darkness*, 236. マリアンも、アダムズの祖母ルイザと同じように、自分がアダムズ家とは異質の存在であることを生涯忘れなかった。むしろ、彼女は、アダムズ家の人間となるより、フーパー家の人間としてとどまることを望んだ。アダムズはそんな妻に理解を示し、彼らは結婚後アダムズ家とは一定の距離を置いた関係を保っていた。だが、彼女が女性として望んだ生活は、社交界の華やかさ、知的な洗練の面では大きな差があったが、結果としてアダムズ家の女性達と同じものであった。本論においては、これ以後、マリアンをアダムズ家の女性として扱う。
- 17) 三人の学生は、James Lawrence Laughlin, Henry Cabot Lodge, Ernest Young である。この共同研究は、1876年に *Essays in Anglo-Saxon Law* (Boston: Little Brown & Co., 1876) として刊行された。アダムズ自身の研究は、冒頭のエッセイ“Anglo-Saxon Courts of Law”にまとめられている。アダムズが「女性の原始的権利」の内容をまとめるにあたっては、家族法を担当したヤングの論文から受けた示唆が大きい。
- 18) Samuels, *Young Henry Adams*, 261. アダムズは、1875年4月発行の『北米評論』にメイン卿の Sir Henry Sumner Maine, *Lectures on the Early History of Institutions* (New York: Holt & Co., 1875) に対する書評を執筆している。メイン卿は、その著書の中で、女性の地位についてロンドンで行った講演(“The Early History of the Property of Married Women”)と同様の見解を述べていた。Chalfant, *Better in Darkness*, 308.
- 19) Adams, “Primitive Rights,” 338.
- 20) ホメーロス、呉 茂一訳『オデュッセイアー』上巻(岩波文庫, 1971年), 43-45.

- 21) Adams, "Primitive Rights," 357.
- 22) Ibid., 344.
- 23) Ibid., 360.
- 24) Barbara Welter, "The Cult of True Womanhood: 1820-1860," *American Quarterly* 18 (Summer 1966): 151-74.
- 25) 曾祖母のアビゲイルや祖母のルイザは熱心なキリスト教信者であったが、妻のマリアンはアダムズと同じく宗教には懐疑的であった。
- 26) さらに、経済的な問題、必要な教養を身につけるための教育の問題もあったことを忘れてはならない。Nancy F. Cott, *The Bonds of Womanhood: "Woman's Sphere" in New England, 1780-1835* (New Haven: Yale University Press, 1977), chap. 2; Carroll Smith Rosenberg, "Beauty, the Beast and the Militant Woman: A Case Study in Sex Roles and Social Stress in Jacksonian America," *American Quarterly* 23 (Winter 1971): 562-84; idem, "The Female World of Love and Ritual: Relations between Women in Nineteenth-Century America," *Signs* 1 (Autumn 1975): 1-29; Charles E. Rosenberg, "Sexuality, Class and Role in 19th-Century America," *American Quarterly* 25 (Summer 1973): 131-53.
- 27) アダムズは、1880年にワシントンのラファイエット広場に移ると、「五つの心」(the five of hearts) と名付けられたサークルを中心に、選りすぐった人々だけを自宅のサロンに集め、ワシントンでも有名な排他的な社交生活を行った。「五つの心」のメンバーは、アダムズ夫妻の他に、政治家の John Hay 夫妻、それに地質学者の Clarence King であった。O'Toole, *The Five of Hearts*, 68-77.